



書評バトル2014

授賞式が行われました

11月5日、書評バトル2014で見事「図書館長賞」「戸山図書館賞」を受賞したお二人に深澤図書館長より賞状および副賞が授与されました。



【受賞の様子：大江さん(左)、深澤図書館長(右)】



【展示場所の前にて：大江さん(左)、和田さん(右)】

図書館長賞は、「忍ぶ川」の大江公樹さん（オオエ コウキ、政治学研究科2年、ペンネーム＝湊標）が最多得票（9票）で受賞となりました。大江さんは昨年につながる図書館長賞の受賞です。連覇おめでとうございます！

また今年から新設された「戸山図書館賞」は得票数が多いものの中から、戸山図書館にて選考し、次点（8票）だった「ハーモニー」の和田祥子さん（ワダ ショウコ、文化構想学部3年、ペンネーム＝檜山あんず）の手に輝きました。初受賞おめでとうございます！



【賞状と書評を書いた本を持つお二人】

◆大江公樹さんの書評

作品:『忍ぶ川』 三浦哲郎 新潮文庫 1965

書評:人生と宿命——救ひ無き文学を求める人間への一冊

我々は小説を読む際、「私ならかうする」、「主人公にかう助言したい」と思ふことがあるだらう。話の結末が悲劇的でも、さう思へるだけ救ひがある。『忍ぶ川』は、さういふ小説ではない。読めば人知の及び得ない宿命といふ存在の大きさを感ぜ、「私なら」と思ふことを忘れるのだ。

『忍ぶ川』には、四人の兄妹達を自殺・失踪で次々に失った「私」を主人公とする幾つかの短編が収められてゐる。いづれも著者、三浦哲郎自身の体験に基づいてゐる。兄妹の「病んだ血」を分かち宿命に怯える主人公は大学生のある日、娼婦の街に生まれ貧しい父と弟妹をもつ志乃と出会ひ、共に生きてゆかうとする。

結末が幸福なものか否かはここには書かない。寧ろ留意すべきは、この話に外部の読者が入り込む余地が存在しないといふことである。例へば途中、中絶の決断が出てくる。普段それを良く思はずとも、その場面では黙つて事の推移を見守るだらう。切実な生活の底に流れる宿命を思ふと、口出しは畏れ多いのである。

現代は不幸を救ひ上げる理論や主義には事欠かない時代で、不幸な事件の翌朝には聡明な「改善策」の記事が載る。しかし人生が宿命といふ後戻り出来ない、不可知な存在の内にあると知る人間の生理にとつては、かういふ風潮は窮屈にもなり得よう。『忍ぶ川』に救ひは無い。しかし救ひの無さこそ、このご時世我々の意識を人間本来の立ち位置へと引き戻す、大変貴重なものではないか。

◆受賞決定後のコメント

「良い出会ひをした」と思つてゐた本について書きましたので、受賞することができ大変嬉しく思ひます。読んで下さつた、また投票して下さつた方々に御礼を申し上げます。

『忍ぶ川』に、多美といふ女の子が出てくる一節があります。

「これ近道？」あるきながら私が訊くと、

「いや、遠道。」と多美はいった。

「なぜ、遠道をゆく？」

「だって、父ちゃんはあるがくるまで死ななていうから、あんたがきたとたんに死ぬんじゃないのけえ？」

多美はまじめくさつてそういったが、私が思わず足をゆるめると、駈けるようにどんどんさきを急ぐのであった。

たつたこれだけの表現で、多美の性格や表情が、ありありと浮かび上がってきます。多くを語りながら無駄がない、いや、むしろ多くを語るがゆゑに無駄がない。これは『忍ぶ川』といふ小説全体にも言へることです。

『忍ぶ川』は文庫本で50ページ足らずの短編小説です。授業の合間など、少し時間ができた時に手に取つてみては如何でせう。

◆和田祥子さんの書評

作品：『ハーモニー』 伊藤計劃 早川書房 2008

書評：人が人であるということの意味とは

人の健康がすべてコンピュータで一元管理され、「有害な」食品は法律で禁止される。そしてそれをもとに人々がランク付けされる……そんな社会で起こる、世界同時多発自殺。その背後にある存在とは、そしてその動機とは何なのか。SFでありながら、人が人であるということの意味を問う一冊となっている。

本作のようなコンピューター中心の管理社会、そしてそれによるランク付けは科学技術の発展とともに実現できない社会ではなくなりつつある。しかし、それが実現することで人の心と技術発展に伴う新たな倫理観の間に確実に生じる齟齬が明確に描かれた本作を読むと、果たしてこのような世界の実現が本当に「良いこと」であるのだろうかと考えさせられてしまう。中でも、「人的リソース」としての人間だから、という観点からの同調圧力には読んでいて息苦しささえ覚えた。

ぜひ、それを判断するための要素として、本作をエンディングまで読んでほしい。慣れない記法に冒頭は読みづらさを感じたとしても、最後にはその意図と結末とが結びつき、本作のテーマに気付かされるであろう。そして、それをハッピーエンドととるか否かは読んだ個人にゆだねられているだろう。しかし、いずれの結論にたどりつくにせよ、人間がなぜ人間なのか、自分とはどういう存在なのか、考えさせられることは間違いない。

◆受賞決定後のコメント

この度は、戸山図書館賞に選出していただきましたことを誠に光栄に存じます。

800字という文字数は簡潔なレビューにするには少し長く、かといって本格的に作品について語るにはあまりにも短い字数であるため、何を書くべきか本当に悩まされました。

特に『ハーモニー』という作品は、高校時代に大きな衝撃を受けた作品であったため、その魅力をどれだけ伝えられるかは大きな不安でもありました。しかし、大学入学後は学部でも内容や本文の記述形式、そして装丁まで多くの角度から自分なりに分析し、強い思い入れを持つようになっていました。そのため、多くの方に伊藤計劃氏の手による世界の魅力を知っていただきたい、その一心で書いては削る作業を繰り返してこのような形になりました。

私が書いた書評を通じて、一人でも多くの方に『ハーモニー』の魅力が伝わったならば、これ以上にうれしいことはありません。

この度は誠にありがとうございました。

＊「忍ぶ川」、「ハーモニー」の2点とも図書館にありますので是非読んでみてください。

早稲田大学戸山図書館